

◆ 最優秀賞 ◆

アサーティブを知って

砂中学校

1年

村橋

奏来

むらはし そら

みなさんは、「アサーティブ」という言葉を聞いたことがあるだろうか。アサーティブを簡単に説明すると、日々のコミュニケーションを豊かにしていくための一つの手段ではないかと私は思う。またインターネットで調べてみたところ、「自己主張すること」と書かれていた。私は、このアサーティブがもつとたくさんの人に広がってほしいと思う。

私がアサーティブを知ったのは、小学五年生のころだった。当時の担任の先生がアサーティブを十年以上習っていて、それがきっかけで道徳の授業で教えてもらっていた。はじめは、アサーティブという言葉聞いて思い浮かぶこともなければ、聞いたことすらない単語だった。しかし、だんだんと授業を受けていくうちに、わかってきた気がした。最初の方の授業は、先生が例題を考え、それをクラス全員で解決していくという内容だった。例えば、「友達とケンカをしてみた時、どのようにして気持ちを伝えればいいのか」ということや、「自分にとって苦手な相手にどう接して、付き合っていくべきか」ということなどについて考えた。私は、はじめ、自己主張と聞くと、相手に自分の気持ちを素直に伝える、つまり、自分の気持ちがストレートに伝わってしまうため、いいイメージではなかった。そのため、自分の意志よりも相手の意志を尊重してきた。でも、アサーティブは違った。自己主張は自分の意志を伝えるだけでなく、相手の意志もしっかり受け入れ、自分も相手も、いい気持ちになることだと学んだ。私は、アサーティブについてまだわかっていないことがたくさんあると感じたと同時に、アサーティブは奥が深いと思った。

このころ、私はある思いに悩まされていた。一言で言えば、仲間はずれだ。下校班は私をふくめ女子三人で帰っていたが、どうしても二人の話に私はつ

いていくことができなかった。私だけクラスが違うこともあって、一生懸命話に参加しようとしても、何の話をしているのかわからず、二人の会話を聞いているだけだった。それから私は、一人で帰ることが多くなった。周りの友達や両親に相談をしてみたが、解決方法として、「先生に言っておあげる」と言われた。けれども、私はそのことによりもつと嫌われてしまい、話せなくなってしまうと思った。でも私は先生にどうすればいいか相談してみた。先生はこう言った。

「アサーティブを使うべき時じゃない？」

と。私は、この言葉を聞いた時、とても不安な気持ちになった。自分一人でアサーティブを使えるだろうか、どんなタイミングで言えばいいのか、という気持ちが頭をめぐった。それから、先生と何度かハーサルを通し、ついにアサーティブで伝える日が来た。とても緊張した。一度、明日にしようとも思った。しかし、目をそむけてはいけない、しっかりと向き合わなければいけない。そう思った。私は練習通り、話すことができた。二人はしっかりと目を見て話を聞いてくれた。話し終わると二人は、

「ごめんね。これからもよろしくね。」

と言ってくれた。とてもうれしかった。ほっとした。それから、一人で帰ることもなくなり、三人で話しながら帰るようになった。

この経験から、自分の意志を大切にすることがコミュニケーションをするにあたって大事だと思った。また、私以外にも、たくさん人の悩みに苦しんでいる人がいると思う。そんな人にも、アサーティブをつかって解決してほしいと思った。

◆ 優秀賞 ◆

大切なものを守るために

大東西中学校

3年

佐藤 さとう

唯花 ゆいか

この世から、ネギトロがなくなるなんてありえない。例えるならそれは、わたしにとって家族が入院してしまうくらいの衝撃だ。

近い将来、私がおばあちゃんになる頃には、マグロが獲れなくなるという記事が目が留まった。その本によると、六十年後にはマグロの親魚が約七分の一にも減っているそうだ。世界中で獲れるマグロの約八割は、日本で消費されているらしい。

「食べ過ぎ、獲りすぎなのであれば、私、少し我慢します！」

気になって調べてみるとそんなに単純な話ではないと分かった。その大きな原因の一つは、なんと地球温暖化だというのだ。困った……。私には地球温暖化を止めるなんてそんな大きなことはできないそうにもなく、今このマグロの味をしっかりと覚えておくことしかできないのだろうか。それにしても、一体地球温暖化とマグロがどう関係するのか。

そもそも地球温暖化とは、人間活動による化石燃料の使用や森林の減少により、大気中の温室効果ガスの濃度が急激に増加し、大気の温室効果が強まったことが原因で起こると考えられている。それに伴い、海の水面温度が上がる、温帯性の海藻が減り、代わりに亜熱帯性の海藻が増加して多様性も低下する。その上、魚の活動時間が長くなるため食害が増え、マグロの餌となる小魚の藻場が衰退するという。さらに、マグロの産卵の水温は二十六度と極めて限定されているうえ産卵域も限られているため、水温上昇により産卵できる場所自体が少なくなり、仮にうまく産卵できたとしても稚魚の成長が極めて悪くなるのだ。また大人のマグロは、海の中で泳ぎ続けているため体温が上昇するのだが、調節可能な範囲を超えるとオーバーヒートして回遊できなくなる。

このように、多様な方面からの影響で、温暖化はマグロの成長に害をもた

らす。知れば知るほど絶望的だが、私がおばあちゃんになっても大好きなネギトロを食べるにはどうしたらよいのだろう。大学で研究して温暖化に強いマグロを作れるかな。いや、五十年で確実に研究成果が出るか自信がない。やっぱり、CO₂排出の削減のために、よく言われているあれしかない。エアコンの設定温度を一度控えめにし、レジ袋削減のためにエコバックを持ち歩き、シャワーの使用時間を一分、いや三分減らそう。定番の対策だが、これがまさか将来のマグロにつながっているとは。これを日頃から意識的に実施して、友達にも説明して一緒にやれば効果が出そうだ。よかった、具体的な目標があれば頑張れる。

ところが、世界のCO₂について調べてみると、日本の排出量は世界でたったの三パーセントしか占めていない。つまり、日本中の人々が今から何の生産活動もしなかったとしても、CO₂の排出量を大きく減らすことは不可能だ。さらに、排出量一位の中国と二位のアメリカで、世界の排出量の半分を占めているのだが、なんとこの二か国は、CO₂削減運動には参加しないと宣言している。また私はショックを受けた。経済活動を第一に考えることは大事なことだが、それは地球が元気だから言えることだと思う。地球環境が悪くなれば、国など関係なく世界中、地球中が影響を受けるのだ。もしも私が中国やアメリカのリーダーであったなら、反対意見があつたとしても必ず説得して、削減運動に参加する。自分の国の決断が地球の未来を左右するのだからそうする義務がある。

将来のことを世界中の人が考え、それぞれが理解して納得し、目の前のことだけではない未来を見据えた考えが世界中に広まればよいと思う。私も日々、自分にできることをしっかりと考え続けたいと思う。六十年後もおいしいネギトロが食べられることを祈って……。

◆ 優秀賞 ◆

僕の机はミニサイズ

川越西中学校

3年

田中

柀

たなか しゅう

「ガシャン。」その瞬間、何が起こったのか理解することができなかった。ふと机の上を見るとあつたはずの筆箱が消えていた。僕は「またか。」とため息をつきそうになった。筆箱が机から落ちてしまったのである。授業中に大きな音を立てて、周囲の人の視線は僕に向けられる。僕は赤面するほどの恥ずかしさを覚えた。このような事例は珍しい出来事ではない。学生にとっては日常茶飯事となりつつある。それはなぜか。ぼくは、学校の机が小さいことが大きな要因であると考えた。

前提として、多くの学校が使用している机の広さは、文部科学省が定めているJIS規格により幅六十五センチメートル、横四十五センチメートルである。そして授業に必要な教材は、主に教科書、ノート、筆箱、資料集である。教科書、ノートを広げると机の上にはほぼスペースが存在しなくなる。さらに資料集を用いると置く場所がなくなってしまう。僕はこのような環境で学習しているが、授業に集中することよりも、机から物が落ちないように意識をしようとするものが多々ある。つまり、学生にとって今の机の広さだと圧倒的に狭く、快適に学習できる環境ではないのである。

さらに、最近の学習設備の変化で僕たち学生は窮地に立たされている。それは学校がICT環境を整備したことにより、生徒一人一人にノートパソコンが配布され、新たに授業で使う教材が増えたのである。もし、ノートパソコンを落としてしまったら、周りに迷惑をかけるだけでなく、壊してしまう可能性が出てきてしまう。より多くのスペースを奪われ、落としてはいけない状況になってしまったのだ。僕は、従来の机の上に収まらないような教材に加えて、ノートパソコンという電子機器も加わり、落とさないように授業を受けることで精一杯である。

そんな中、大人たちはどのような対応をしてきたのだろうか。机の大きさは、JIS規格によって定められている。元々、定められていたJIS規格

は「旧JIS規格」と言い、幅六十センチメートル、奥行き四十センチメートル以上のサイズである。この大きさが一九九九年に「新JIS規格」へと変わり、幅六十五センチメートル、奥行き四十五センチメートル以上になった。今、多くの学校で使われているサイズはこの大きさである。この改正によって、幅、奥行きがそれぞれ五センチメートルずつ増えた。しかし、この変化は一見広くなったように聞こえるが、我々学生にとってはほんの僅かな差でしかないのである。さらにこのサイズの机は、新JIS規格の中で最も小さい。一番大きいサイズは幅七十センチメートル、奥行き五十センチメートルにもなる。机のサイズは大きくしようと思えば、変えることができるのである。つまり、大人たちはJIS規格を改正したが、実際には多くの学校は最小寸法を使用していて、学生にとって大きく学校生活が快適になるわけではなかったのである。

このように現在の学校における学習環境は、机が小さいことで集中して授業を受けることが出来ないものである。僕はこのような現状をふまえて自分たち、そして今を支えている大人たちに何が出来るだろうかと考えた。まず自分たちは机の上を効率よく使えるように考えることが大切だ。与えられている机の広さでノート等の配置を考えて、工夫して使うのである。しかし、この方法には限界がある。だからこそ、子供の学習環境を変えることが出来る大人たちが率先して、動き出すべきではないだろうか。机のサイズを大きくすることでのびのびと学習に励むことが出来る。僕にとってこの問題は深刻であり、一丸となり解決しようとして取り組まなければならないと考える。急速に変化していく環境に合わせ、より充実した学習環境を整えるために私たちも対応すべきではないだろうか。日本の未来を背負っていく星たちを輝かせるために。

◆ 入 選 ◆

祖母の病気

初雁中学校

2年

関口 せきぐち ひじり

「最後に祖母と買い物に行ったのはいつだろう……。」

私が小学三年生までは、夕方になると祖母と話をしながらスーパーに買い物に行くのが毎日の日課でした。今日の学校での出来事、好きな食べ物の話しりとり。夕方の楽しみの一つになっていました。

しかし、祖母は少しずつ家事が出来なくなり、同じ事を何度も繰り返すようになってきて、話も成り立たなくなったのでした。

約三年前、祖母は病院でアルツハイマー型認知症と診断されました。アルツハイマー型認知症とは、記憶に深くかかわる脳の海馬という部位から萎縮が始まり、徐々に物忘れが進行する病気です。そして、現在ではアルツハイマー型認知症を根本的に治す治療法は、ありません。昔の記憶が最近のことと思うようで、先日も昔通っていた洋裁学校へ今から行くと準備をして外に出ようとしたり、今いる場所が分からなくなり、動揺して困っていました。食事をした事さえ忘れてしまうようになってきて、私たち家族も祖母に掛り切りで一日が疲れ果ててしまう事が日々あります。そんな姿を目の前で見ていると、正直言って何とも言えないもどかしいような気持ちになり、イライラしてしまう事がよくあります。だから、「祖母は病気なんだ、仕方がない。」

と何度も自分に言い聞かせるのです。自分では、正しいと思って行動しているのだから優しく接してあげないといけないのに、私はたまに冷たい態度を取ってしまう事があります。

きっと、そんな態度を取ってしまうのは、祖母にすっかりして欲しい、また前のように普通に話がしたいと思う気持ちが残っているからだと思いません。

でも、祖母の今の病気を受け入れなくてはいけないし、なりたくてなった訳ではない病気だから、祖母の気持ちも考えてあげなくてはなりません。もし、私が逆の立場だったらと考えると、想像がつかないくらい怖いと思います。

だから、祖母に寄り添っていかうと考えました。母が祖母のお世話をしている時、私も手伝いをしたいと思っています。家族みんなが穏やかな気持ちで接してあげられたら、祖母の笑顔も今より増えると思います。いつかまた、祖母と買い物に行ける日が来ると信じて、今度は私が祖母を買い物に連れて行こうと思います。楽しい話としりとりをしながら、昔みたいにまた、二人でいつものスーパーに行きたいと思っています。

◆ 入 選 ◆

地球に平和が訪れる日を目指して

富士見中学校

3年

大西

翼

おおにし つばき

日本に住む僕達は、不自由なく毎日を過ごしている。しかし、世界にはそうでない人もたくさんいる。インターネットで調べてみると、世界で五歳の誕生日を迎える前に命を落とす子どもの数は年間約二千万人、そして学校に通っていない子どもは約一億千五百万人もいるそうだ。その他にも、その七十%が、有害で過酷な状況下での労働を強いられるという児童労働、ストリートチルドレン、飢えに苦しむ人々がいる。世界では、今この瞬間にも様々な問題が起きている。

僕は小学二年生の頃、タイに行ったことがある。その旅行で、僕はガイドのお姉さんととても親しくなった。ガイドのお姉さんは日本語ができるので、タイでは日本人観光客のガイドをして比較的収入の多い方だと思っけれど、田舎にはたくさん兄弟がいるとのことだった。翌年、タイを再び訪れた時に、日本語を勉強しているガイドのお姉さんのために、ノートを持って行った。ガイドのお姉さんはとても喜んでくれて、持って行った僕の方もうれしくなったのを覚えている。そしてガイドのお姉さんは僕にタイの文化や歴史を、僕はガイドのお姉さんに日本の文化であるおりがみを教え合い、国際交流という点でもとてもいい経験になった。そんな大好きなタイだが、その経験の中で今でも忘れられない光景がある。それは僕が車に乗っていた時のことだ。信号で止まっていた車の窓を叩く音がした。窓を開けてみると、僕と同じくらいの年の男の子が立っていて、その手には観光客用の売り物が握られていた。もう夜で辺りは暗く、その日は雨も降っていたのにもかかわらず、なんとその男の子は働いていたのだ。それも、裸足で傘もささずに。本やテレビで知ってはいたが、現実に向くその姿に、僕はとてもショックを受けた。そして、僕と男の子の置かれている環境の違いの大きさに複雑な気持ちにな

り、「世界にはこの男の子のような子どもがたくさんいるけれど、僕は今のままでいいのだろうか。」と思った。

日頃、僕は物があふれている中で、ほしいと思う物が簡単に手に入る。だから、まだ使えるものがあってもすぐ新しいものを買ってしまう。それだけではなく、僕は当たり前のように食べる物があり、当たり前のように学校に行っている。タイを訪れたことで、僕達にとって「普通」と思っていた事は、とても「幸せ」なことなんだと改めて思った。

僕は、ユニセフの募金をしたことはあるが他に何かできることはないのだろうか。そこでユニセフの活動に興味を持った僕は、調べてみることにした。ユニセフとは、百五十六の国と地域で子どもたちの共存と、健やかな発達を守るために保健・栄養・水と衛生・教育などの支援事業をその国の政府やNGO、コミュニティと協力して実施している団体のことだ。主な活動としては、学校に教材やノートなどを届けたり、エイズの感染者の治療、孤児や難民、ストリートチルドレンの保護、募金活動など、他にも色々な分野で活動しているそうだ。僕は調べていくほど、ユニセフの活動がすばらしい仕事だと感じた。

僕はそのために募金やボランティアへの参加など、今できることを少しでも実行していきたい。そして、少しずつ世界に目を向けて国際ボランティアについて学び、いろいろな人との交流を通して、相手も思いやる事が大切だと思う。僕にできる事はほんの些細な事だと思っけれど、それを積み重ねて僕なりの国際協力をしていきたい。そして、世界中の人々が心から笑顔になれる日が来た時、世界に本当の平和が訪れるのではないだろうか。

◆ 入 選 ◆

選択しづらい世の中で

野田中学校

3年

たかやなぎ ふうか
高柳 風歌

最近、学校に行くことが全てではないという意見が、尊重されてきている。私もそう思う。しかし、学校に行くことが悪いことだとは思わない。むしろ、私は学校には行った方が良いと思っている。学校に行かないことを尊重し、人と関わる場が小中学生の頃からないというのはだめだと思う。

私は小学校一年生の頃、ずっと一緒に居るような友達がおらずクラスの先生も苦手で学校が嫌いだった。毎朝のように腹痛、頭痛がして何回も休んでいた。中学一年生で、また同じようになった。中学校で私と同じ小学校だった人は少数で、多数の学校でほとんど雰囲気が出来上がっていた。私はなかなか馴染めなかった。でも小学一年生の頃とは違って、時間がたてば慣れる、気持ちの問題だから、と分かっていたから腹痛や頭痛で休むことはしなかった。それでも学校が嫌だということに変わりはなかったから、私は学校には勉強をするため、部活にはバレーがしたいから、と人間関係を一切気にせず目的を決めるようにした。そう意識を変えてからは、学校へ行くのがだいぶ楽になった。それで私は色々なことに積極的になれるようになった。部活で副部長に立候補し、仲間とたくさん試合に挑み、ぶつかり、たくさんさんの経験をした。今思うとあの時無理をしてでも学校に行こうと頑張って良かったと思う。

学校に行かないとこのような経験はなかなかできない。別にいいと思うかもしれないが、学校に行かないことは、むしろ自分を追い込んでしまうのではないかと思う。学校に行っていれば嫌でも色々な人と関わらなければいけなくなる。私はその中で、考えの似ている人と一緒にいて、苦手な人とは距離をおいている。全く分かりあえない人もいたけれど、その人を理解できなくても、ほんの少しだけ受け入れられるようになったり、少しだけ共感でき

たり、少しだけ受け入れてもらえるようになったり、こういうふうには話せばこの人は分かってくれるのだと気づいたりもした。小学校の時と比べ私がこなれたのは、許容範囲が広くなったからだ。家にずっといたり、同じ人とは遊びでいては、許容範囲がどんどん狭くなってしまふ。ネットがあるから色々な情報を手に入れられると思うかもしれないが、ネットは極端な意見ばかりだ。私だったら自分の信頼できる人やその他色々な人の意見を聞き判断すると思う。そっちのほうがよほどたくさん人の情報が得られるだろう。ネットは曖昧な情報が多いから、この世界にたくさんある曖昧な情報や、少し変わった意見を受け入れられなくなってしまふのではないか。その結果、自分と違う意見が怖くなり、敵だと思い、逃げたくなる。その範囲がどんどん狭くなれば、自分を追い込むことになる。

でも私は「学校に行け」と言っているのではなく、今、少しだけ無理をして行ってみたらどうかと提案している。その一例として学校をあげただけで、それは習い事でも塾でも良いと思う。私も実際、拒否反応でめまいと吐き気がとまらなかつたときがあったが、私は学校に行くという選択肢を選び、意地でも行ってやろうと薬を飲みやると落ち着いたのがついこの間だ。そこまですていくものかと思うかもしれないが、学校には自分の三年間をかける価値はある。社会では多様性が大切だとも言うが、その根本には大事な協調性がある。基本の中に自由があるように、たくさん人の人の選択肢ができすぎてしまったこの世の中で、自分に合ったではなく自分にとって正しい選択肢を選べると良い。一度そうなってしまつては、戻ることは簡単ではないが、今もう一度自分と向き合い、これから先に楽しめる判断をしてほしい。

◆ 入 選 ◆

日本の河川の現状

寺尾中学校

3年

松本

大晴

まつもと

たいせい

私は、現在日本の在来種が危機的状況に陥っていると考える。それは生態系の変化だ。近年、ブラックバスやブルーギルなどの外来種が日本の在来種をえさとして食べている。この影響により、外来種の個体数は増加傾向にあり、在来種の個体数は減少傾向にある。

僕には、この問題について実感する機会がある。それは、僕の趣味の魚釣りだ。たくさんの釣り方がある中で、とくに小物釣りとルアー釣りで実感する。まず、小物釣りは主に練りエサを使いタナゴやクチボソなどの小魚を釣る釣り方である。僕は釣りに行ったときに釣れた魚は写真に全て収めている。その中で、年々小魚の釣れる数が減少する反面、ブルーギルがたくさん釣れる。しかも、鮮やかな色をした婚姻色のブルーギルやその稚魚も釣れていた。このことはその河川でブルーギルが繁殖していることがわかる。また、ブルーギルや他の外来種は一度に約二万個以上も産卵し、驚異的な繁殖力を持つている。この現状を放置してはいけない。

二つ目はルアー釣りだ。ルアー釣りは主に疑似餌を本物のように動かし、ブラックバス、ブルーギル、ナマズなどを釣る釣り方である。そして、ここ最近釣れたブラックバスから今まで経験したことがない目を疑うような光景を目の当たりにした。なんと、腹がパンパンに膨れたバスから大量のオイカワやクチボソなどの在来種の魚がでてきた。この時私はブラックバスに全く抵抗できない小魚達を見てとても絶望的な気持ちになり心が張り裂けそうだった。さらにお腹に卵を持っていたメスのオイカワもでてきた。私はこの魚を見ていろいろなことを考えた。例えば、卵を産卵しにいつているときにブラックバスに食べられてしまったのではないか。もしくは、産卵するためのエネルギーを確保するために食事をしていたときに食べられてしまったのではないか。日本の在来種が水中で未知の外来種から日々死にもの狂い

で逃げているということ人間は理解しているだろうか。今、この瞬間にも外来種に抵抗できない在来種が命を落としているかもしれない。

そもそも外来種を外国から輸入したのは私達日本人である。その影響で今までに数えきれないほどの在来種の命が外来種によって奪われている。その一方で、日本人はブラックバスやブルーギルなどの外来種駆除を積極的に行っているのだろうか。少しは行っていると考える人もあると思う。しかし、それではあまり効果がないと私は考える。理由は先程述べた通り、外来種は驚異的な繁殖力を持つているからだ。私はこのことから外来種の個体数を減らすためには一人でも多くの人が現状を理解し、駆除活動に協力する必要がある。

その例が外来魚回収BOXである。これは滋賀県の琵琶湖に二〇〇三年から設置されたものだ。これは、名前の通り主に釣り人や琵琶湖で遊ぶ子供達が外来魚回収BOXに釣れたブラックバスや網で採ったザリガニなどを入れ、それを業者が魚粉にして飼料や肥料に加工する。

みなさんはこんな活動で外来種が減るのかと疑問に思うかもしれない。しかし、ネット上ではバス釣りの釣果が全国で毎日何百件と上がっている。これらのブラックバスが全国で毎日三百匹駆除されたと仮定するとわずか三十日で九千匹が駆除される。しかし、これだけでも効果はあるが外来種の驚異的な繁殖力を食い止めることはできない。

このことから、外来種を駆除するには国民全員が一丸となって協力する必要がある。その例として、テレビで放送されている番組の取り組みなどに積極的に参加することだ。最後に、私は近い未来に外来魚回収BOXが全国各地のあらゆる河川で設置され、一日でも早く日本から外来魚がいなくなると同時に外来種がいなくなること心から願う。

◆ 入 選 ◆

百年後の動物の幸せのために

砂中学校

1年

根岸 ねぎし
愛梨 あいり

「TNR」という言葉を皆さんは知っていますか？

小学二年生の頃、私はよく市内の神社に行っていました。目的は、猫です。

その神社の地域猫は、触るとゴロゴロ喜んでくれる子や、ニャーニャーと返事をしてよくなついてくれる子たちでした。よく見てみると、猫たちの耳がサクラの花びらのようにV字にカットされていました。気になり調べてみると、「TNR」という単語ができました。「TNR」とは、「Trap（捕獲）」し、「Neuter（不妊去勢手術）」を行い、「Return（元の場所に戻す）」という意味です。その手術が済んでいる印として、オスは右耳先、メスは左耳先を、サクラの花びらのようにカットされています。「TNR」をすることは、繁殖を防止し、殺処分数を減らすのに最も有効な手段と考えられています。

私は、現在どのくらいの犬や猫が殺処分されているのか、川越市保健所に聞いてみました。令和元年度は犬0匹、猫1匹、令和二年度は犬1匹、猫3匹、令和三年度は犬猫共に0匹でした。この数字を聞いて川越の動物愛護意識の高さを誇りに思いました。保健所の方も言っていました。この数字の裏には、保護団体の皆さんの大変な努力があったのだと感じました。川越での殺処分数は0に近いですが、埼玉県では令和元年度は犬八十六匹、猫五百

三十六匹、令和二年度は犬四十四匹、猫六百五十二匹、令和三年度は犬十一匹、猫三百二十八匹でした。更に日本全体では、令和元年度は犬五千六百三十五匹、猫二万七千七百七匹、令和二年度は犬四千五百九十九匹、猫一万九千七百五匹で、令和三年度はまだ集計が発表されていません。環境省でも、殺処分をなくしていくための取り組みが進められていますが、まだまだ多いのが現状です。日本はドイツやスイス、オーストリアなどの動物愛護先進国と比べると、百年遅れていると言われています。それらの国では、店頭での犬や猫の生体販売は禁止され、ペットを飼う場合は保護団体から引き取るか、ブリーダーから購入するしかありません。すぐには難しいかもしれませんが、日本もそのようになつたら良いと私は考えています。

私の理想は、日本の殺処分が0になることです。そのために、少しずつですが募金活動をしたり、ペットを飼うと決めたらペットショップに行くのではなく、保健所や保護団体から引き取ったりするなど、身近なことから取り組んでいきたいです。今、中学生の自分にできることは限られていますが、百年後の動物の幸せに少しずつの努力を続けていきたいと思っています。

◆ 入 選 ◆

免許返納したほうがいいのか

砂中学校

3年

成富 颯 なりどみ はやて

最近高齢者が運転する車が逆走をしたり、アクセルとブレーキを踏み間違えたりすることによる事故のニュースをよく耳にする。交通事故の中で六十歳以上の高齢者の割合は年々増加し続けている。

免許返納率は増加しているものの、都道府県によって大きな差がある。バスや電車などの公共交通機関が十分でない過疎地域での免許返納率は低い。七十八歳になる私の祖母は、今年の五月に免許を返納した。祖母の住んでいる所は、駅が遠かったり、スーパーマーケットも近くに無く、徒歩で向かうのが厳しいため、免許返納と同時に電動アシスト自転車を購入した。祖母は、狭い道でもスピードを出す人で、隣に乗っていて怖い思いをしたことが何度もある。事故を起こす前に免許を返納したことはとても嬉しい。祖母は連日、高齢者による交通事故のニュースを見たり、友達が事故を起こしてしまったりしたことを聞いて免許を返納したと聞いたことがある。高齢者で運転に自信がない人は、事故の加害者となる前に免許を返納することは大切だなど、実感した。

しかし、公共交通機関が不十分な過疎地域では、免許返納率が低くなっている。過疎地域では、買い物などに行くために車が必須となっているところ

が多いが、公共交通機関が不十分なため、高齢者がハンドルを握らざるをえないのである。車で十分の所でも徒歩だとかなり時間がかかり、高齢者だと、より時間がかかるため、車に乗り続ける人が多いと思う。高齢者が免許を自分から返納するためには、どのような取組が必要なのだろうか。

私は、高齢者が免許を返納した後も、外出しやすいようにタクシーやバスの料金を割引きすることや、バスが走っていない地域では、コミュニティバスなどを走らせることで、高齢者が生活しやすい環境をつくっていくことが大切だと思う。祖母は、コミュニティバスが自分の家の近くまで通るようになり、駅やスーパーマーケットにも簡単に行くことができるため、免許返納をしたと言っていた。高齢者にとっては、コミュニティバスが最強の足となる。免許返納後も、ためらいなく外出できるような仕組や制度を作っていくことが、高齢者による自動車事故を減らすカギとなると思う。

私は車が好きで、自分の好きな車が、悲しい事故の道具になってほしくない。みんなが安心して生きていられる世界であるために、少しずつでも世の中が変わっていくことを願う。

◆ 入選 ◆

未来の僕たちができること

砂中学校

3年

わたなべ ひろと
渡邊 大翔

現在、ウクライナとロシアの間で行われている戦争に、世界中が焦点を当てています。テレビで現地の様子を見ると、とても緊迫した状態であることが分かります。銃撃戦が行われているすぐ近くで小さな子どもが泣き叫んだり、血だらけの人が担架で運ばれていたり、道に亡くなった人が横たわっていたり、戦車からの砲撃で建物が壊れていたり……。僕はまるで社会の教科書で見た戦争そのもののようにだと感じました。自分が生きるこの時代に、同じ地球上で兵士や民間人の血が流れていることを目の当たりにして、強い恐怖を覚えました。徴兵された家族の生存を毎日祈る人、爆撃で友人を亡くした人、吹き飛んだ我が家を見つめる人、子どもを亡くした親……。そんな人々のことを考えると胸が締めつけられるような思いになります。昼には銃声や大砲の音が鳴り響き、夜には眠れないような緊張感で張りつめた空気の中過ごす一日を、僕は耐えることが出来ないと思います。

コロナウイルスが流行する前の夏、僕は沖縄に行きました。旧海軍司令部壕やひめゆりの塔へ行き、戦争について少しだけ学びました。生き残った人の体験動画が流れていて、自分が死ぬと戦争を伝える人がいなくなってしまう、と語っていたことがとても印象に残っています。

では、どうして戦争は起こるのでしょうか。勿論、突然ミサイルが発射さ

れるわけではありません。ほとんどの戦争は、時代的背景や意見の食い違い、民族間の争いといったささいなことがきっかけとなって始まります。こう考えると戦争は事前に防ぐことが出来るのではと感じます。何らかの食い違いが起こった時に話し合いで解決することが出来れば、戦争を回避することが出来るのではないのでしょうか。顔を合わせて対話するといったことを疎かにするから、戦争が始まってしまうのだと思います。目先の目標を達成するために相手を傷つけるのではなく、一度立ち止まって、相手の立場になって考える、そういった基本的な事を忘れないことが大切です。

よく「戦争」の対義語に「平和」という言葉が使われます。辞書を引いてみると、平和とは戦いや争いのない穏やかな状態のことを指す、と書かれています。つまり、今の世界は平和ではないのです。

戦争とは何なのだろう。なぜ起きてしまうのか。戦争で何が得られて何が失われるのか。僕たちはもつと知らなければなりません。これはとても難しいことですが、相手の立場に立ち、違いを知ることが大切だと思います。戦争について深く知り、後世に受け継いでいくこと。それが未来を生きる僕たちの使命なのではないのでしょうか。

◆ 入 選 ◆

考えるだけでなく行動へ

大東西中学校

3年

かわぐち のどか
川口 希和

二〇二〇年ごろから、コンビニやスーパーでのレジ袋有料化やエコバッグ持参の推奨、お菓子のパッケージが紙パッケージに変わるなど日本では環境問題を解決していくための活動が目に見える形で行われています。そのような中、いまだにポイ捨てされているゴミや食品ロスなどが目立っていることも現状否定できない事実だと思います。

私は、学校の授業の一環としてSDGsについて学習しました。そして、その授業がきっかけで環境問題について調べてみたり考えたりすることが多くなりました。学習を進めていくにつれて、今の日本がどれだけの環境問題を抱えているのかや、今後起こり得る十年後二十年後の影響などを知ることができました。それと同時に、今まで以上に環境やエコを気にかけた生活をするようになりました。

そのような中、普段生活していても「もったいないな」や「環境に悪くないかな」などとふと考えることがあります。

例えば学校の給食です。私の通っている学校ではご飯やパンを中心とした給食が毎日出ていますが、給食の献立の中で苦手なものや食べきれないものは、量を減らしたり、片付けの際に残したりすることができません。このように毎日あたりまえに口をしている給食ですが、片付けの時間を意識して見ると毎日沢山のご飯やパン、おかずがゴミとして片付けられていることがわかります。コロナ禍といった問題も少しは関係しているとは思いますが、誰も手をつけていないパンやデザートなどをゴミとして捨てていることは個人的にとっても罪悪感を感じ、もったいないと強く思っています。

今まで親や学校の先生から「食べ物は大切にしましょう」と習ってきたのにも関わらず、学校で食料を平気で捨てるといった行為は、とても矛盾して

いる部分があるなど感じます。廃棄するのではなく、もっと違う形で対応することはできないのかと思います。

それは給食の時だけでなく日常の中でも同じように感じることも多くあります。自分で少しでも行動に移せることがないか考え、ゴミは分別を心がけたり、ご飯は食べきれぬ分だけよそい、廃棄する量を減らすなどして環境保護の活動に協力できるよう努力しています。しかし、今あげた環境問題を解決していくためには、たった一人の努力だけでは到底改善されるような問題ではなく、意識するだけで何かが変わるような簡単な問題でもないと思っています。

実際にこのまま何の取り組みもせず環境問題をあまり気にしない生活を送った場合、きつと将来苦しむことになるのは周りの動物達や私達人間自身です。しかし、そんな未来を変えることができるのは私達人間だけです。それを踏まえた上で今後は環境問題を調べみんなが知ることだけでなく、未来の生活や身の回りの環境を考えた上で自分には何ができるのか、どんなことをすれば解決の一步に近づくのかを、一人一人が考え、行動に移し、次に繋げていくことが、一番大切だと感じました。身近なところから一歩ずつ取り組んでいくことで、今後の日本や世界をどういった形で生活することができるかが決まるのではないのでしょうか。そして、この先さらに発展していけるかといった、未来に大きくつながっていくのだと思います。

みなさんは本当に環境についての正しい取り組みを行っているのでしょうか。未来の笑顔のためにも、小さなことから少しずつ取り組んでいきませんか。私も、未来の地球のためにエコな生活を心がけていきたいです。

◆ 入 選 ◆

コンプレックスはあってもいい

川越西中学校

2年

牧 まき
和輝 かずき

みなさんは、ちゃんと学校に行っていますか？僕は行けてないです。一年生の三学期の途中から行けてません。何で学校に行けなくなったかの理由は色々ありますが、僕はみんなの会話に入れない事や、なかなか友達を作れないことから、自分の性格がいやになりました。人より周りの事を気にしすぎたり、きん張したり、してしまいます。そんな自分が嫌いです。

お母さんは、

「自分の事を好きになった方がいいよ。」

と、よく言いますが、僕はそんな事は出来ないと思っています。ただ最近、お母さんにすすめられた本の中に、こんなことが書かれていました。

「ひとつのコンプレックスにとらわれると、人間、自分のすべてを否定的に見てしまうものです。何か、うまくいかない事があると、そのせいにしてしまう。その結果、心がちぢみこんで、自分の良いところまで殺してしまう。だから、ますます何もかも、うまくいかなくなる。」

まさしく、今の僕です。また、この本には、「背が低い事で、友人にチビ、チビ助とかかわれて嫌になるという悩みに対して、背が低いから、心はだれよりも大きくしよう。背が低いから、勉強では負けないと、思うようになる。マイナスをプラスに転換していくことが大事です。」と、ありました。僕は少し考え方を変えていこうと思うようになりました。話をするのが苦手だから、人の話をよく聞ける自分になってみる。友達も沢山作るのではなく

て、一人でも二人でもいいから、何でも話せる友人をゆっくり作ってみる。そんな事を考えていたら、少し勇気が出てきた感じがします。

「桜梅桃李」という言葉があります。桜は桜、梅は梅、桃は桃、李は李というように、みんな違ってみんないい。桜には桜の、梅には梅の、桃には桃の、李には李の、それぞれの良さがある。別の花に憧れても、その花になることはできない。でも自分にしかない美しさがある。とてもいい言葉です。

僕は、いつも何でも意見が言えて、すぐに友達を沢山作るような人を、うらやんでいたように思います。でもこの桜梅桃李の言葉を知って、自分にも沢山良い所があるのかなあと、思うようになってきました。

又、お母さんは、「良かった探し」をしなさいと言います。一日の生活の中で、どんな小さな事でもいいから、自分をほめてあげて、良かったと思うようにしていこうと言います。例えば、

「今日も上手に歯をみがけた。なんて、すごいんだ！」

「上手に箸を使って、ご飯が食べられて、本当にすばらしい！」

あたり前だと思っていた事を、あたり前と思うのではなくて、自分はすごいんだと思うと、又少し勇気が出てきました。今は、学校に行けなく、友達ともなかなか会えていませんが、少しずつありのままの自分を好きになって、成長していきたいと思えます。

◆ 入 選 ◆

心を残す

みなさんは「残心」という言葉を知っているだろうか。僕は小学校一年生の頃に空手を始め、日々鍛錬している。空手の稽古中に指導者から、残心について教わったことがある。僕はその時から残心には大きく二つの意味があると認識している。

一つ目は、自分の技が決まったときに相手の次の動きに備えて、緊張の糸をほどかないことだ。空手の組手競技では、四人のうちの二人以上の審判が技を認めてくれて初めて自分の得点となる。残心を意識する前の自分は、自己判断で技が決まったと思ひ込み、油断した際に逆に技を決められてしまうこともあったのである。

二つ目は、相手や試合ができた環境に感謝することだ。つまり勝敗に一喜一憂するのではなく周りの人たちのおかげで試合ができたということに忘れて心に残すのである。ただルールに沿って礼をするのではなく、相手がいるから戦えるという感謝の意味を込めて礼をするのだ。勝負においての残心の考え方だけでなくこれも大切な残心の考え方だと思う。

その考え方の象徴として僕が紹介したいのが、昨年行われた東京オリンピック空手競技で金メダルに輝いた喜友名選手の試合後における振る舞いだ。喜友名選手はまさに残心を体現しているようで、感銘を受けた。喜友名選手は優勝が決まった後にコート上で正座をして深々と礼をしていたのだ。

また、喜友名選手の試合後のインタビューにこんな言葉があった。

「まずは、この舞台に立てることに感謝したい。」

沖縄県民として、日本の空手選手として、史上初の金メダリスト。僕には到底わからないような重圧やプレッシャーもあっただろう。しかし試合後の

川越西中学校

3年

真田 拓飛

さなだ

たくと

振る舞いからも見て取れたように、喜友名選手はオリンピックピックが開催されたことへの感謝、今までお世話になった人への感謝などの様々なものを形にしたのではないかと。喜友名選手の振る舞いは空手という競技の中で残心を示していたように強く感じる。

この残心の考え方については、日常のあらゆる場面で取り入れられるのではないだろうか。

改めて言うと、残心とは周りに自分の心を残す、自分のことだけを考えるのではなく相手にも心を向けることだと思ふ。思いやりに近い考えかもしれないが、自分の周りにいる人全てにいつも思いやりを持って接するということは少し疲れてしまふし難しい。

ところで、いま世界は貧困、飢餓、気候変動、国際紛争など、様々なかつてない危機に直面している。しかし、様々な危機は自分に直接影響が及ばなければ問題解決に向けて動こうとする人は少ないかもしれない。また、問題が大きすぎて自分が何か行動を起こしても何も変わらないと無関心になりがちである。しかし残心の精神で相手（様々な危機）から目を背けずそこに直面している人々に自分の心を残す（寄せる）ことをしてみればどうだろうか。残心の精神を持つ人が増えれば、世界の社会課題や国際紛争がより良い方向に行く一歩になるのではないかと。勝利をつかんだとき、成功しているとき、不自由なく満足して生活できているとき……。人間はどうしても自分のことだけを考えてしまふのではないかと。自分が満たされているときこそ、先を見据え、感謝の気持ちを持つ残心の精神で相手や周りの人のことも考えて行動したい。

◆ 優秀賞 ◆

私が「生きる」ということ

山村学園高等学校

3年

鈴木 芽依
すずき めい

脳死という概念が現れたのは、一九六〇年代の後半である。脳死と臓器移植は、長年倫理的な観点で議論されてきた課題だ。半世紀以上が経過した今でも、明確な答えを出すことができていないのは、死生観が個人で異なるからだと感じている。医学の発展は素晴らしく、救える命も増えた。しかし、脳死に限らず、生命のあり方を問う報道に対し、私は不安を覚えている。

私の祖父は料理人で、人に料理を振る舞うことが大好きだった。しかし、病気になってからは料理が作れなくなり、自分の口から食事を摂れなくなつた。次第に出来ることが減り、亡くなるまでを通じて死というものを初めて認識した。しかし、その後の生活で死を身近に感じる経験はしていない。私が、生きている時間の使い方について考えるようになったのは、「人間は、生まれた瞬間から死に向かって歩いていきます。そう思うと、今日、今この瞬間が惜しくなるでしょう。」という瀬戸内寂聴さんの言葉がきっかけだ。

死を迎えることや、老いることを過度に恐れる風潮に疑問を感じていた私は、死や老いとはむしろ自然なことなのだ、すんなり受け入れることができた。生きられる時間は限られているからこそ、日常を尊いものと感じるようになった。そして、何より身近な人の死生観を理解できるようにもなった。もし、脳死下での延命治療を拒まれたら、はたして受け入れられるだろうか。本人の同意なくして、心臓を動かし続けることは、個人の「生」を尊重していることになるのだろうか。

私は、「生きている」という自分自身の実感を大切にすべきだと考える。目標のために、努力をしている瞬間は最も「生きている」と感じるからだ。曖昧な死の捉え方をしているのは、生命を輝かせることは難しい。必ず訪れる死を受け入れ、生かされている時間ではなく、自分の時間を生きることこそが、理想の生き方なのだ。

私の目指している職業は、看護師である。昨年、様々な大人と関わる機会

があり、それは私の視野を広げる大切なきっかけになった。

今まで、自身が定めた固定観念に縛られていた私は、すぐに物事を白黒に分類しようとしてしまい、息詰まることも多かった。しかし、人生の先輩達は心に余裕を持つことで、今まで見えなかった道が現れ、目標がより明確になると教えてくれた。当時の私にとって、それは斬新な考え方で、すぐに実践することは難しいものだったが、心の余裕を持つと、目標とする看護師像が具体的に見えてきた。

病気や怪我のみのケアをするだけでなく、患者またその家族の人生を豊かにし、その人らしい生き方をサポートすることだ。これは以前の私には思いつかなかった目標である。

多様性が叫ばれる今、個人の生き方、家族の形にも変化が起きている。理解の幅を広げてみることで、他者と共生していくことの意味を深める契機となつている。一方で、これは理想論に近いということも、十八歳の私には分かっていない。だからこそ、今すぐに出来る考え方も見えてきたのだ。それは、「全てを理解しようとしすぎないこと」である。

もちろん、人間関係を築いていく上で、相手に歩み寄る心は大切だ。しかし、家族や友人も所詮は他人である。年齢や、育った環境によって、本人にしか分からない考え方があつたのは当然だ。それを、自分の今までの当たり前の中に押し込めようとするのではなく、心に空けたスペースを利用して受容してみる。多角的なものを見方は、理解するための第一歩になる。小さな意識改革は、理想論を現実に近いづけるための重要な力ギなのだ。私はこれからの経験も糧にして、自分らしい人生を力強く歩んでいく。「生きている」実感を持つということは、自分らしく生きることの根源である。

◆ 入 選 ◆

目に見えない敵

市立川越高等学校

2年

おばた ねね
小畑 寧々

あの時の大好きだった先生が浮かべた涙が忘れられない。先生の涙のわけは、新型コロナウイルスの影響で学校が休校になることが決まったことを、私たちに伝えるために浮かべた涙だった。

「なんで。」「大丈夫なのに。」「やるせない。」自分には遠いニュースの中で起きていたことが、休校という現実を突きつけられると、息が詰まるようになった。あの頃は何をすることもコロナで中止が当然になり、生活していても楽しむことや、目標がなくなっていた気がする。そんな時間が長く続いた。

そんな中、ニュースでコロナ禍における差別の問題について見た。例えば、コロナに感染した人の個人情報特定され、誹謗中傷されたり、医療従事者の本人、またはその家族が、人が集まる場所や会社、学校に行こうとすると拒否されたりするということが起きている。このような差別が起こっていることを知ったとき、学校で学んだハンセン病のことを思い出した。間違った知識から、感染者やその家族を隔離して追いやり、社会から疎外するなどという差別が百年近く続いていた。共通していることは、病気に対する間違った知識が差別、偏見を生んでしまったことだと思う。皆さんは新型コロナウイルスについてどこまで知っているだろうか。コロナに対する不安な気持ちや恐怖心が、差別や偏見に繋がり、SNSなどで他人を攻撃してしまったり

と過度な行動を起こしてしまうのだろう。ただ、他人を傷つけ、差別することは一時的にフラストレーションや不安な気持ちを解消するのみで、その後はすぐに元に戻ってしまう。差別は何も生み出さない。コロナによって感じるフラストレーションを低減させるためには、長期的な視点を持ち、正しい知識を手に入れ、よく考えて行動することが、効果的であると思う。

また、誰もがコロナに感染する場合があります、誰もが差別される当事者になる。自分が差別されたり、逆に誰かを偏見で差別してしまったりする可能性もある。差別や偏見をなくすためには自分自身で考え、正しい知識と倫理を持ち、一人一人が自らの行動に責任を持つことが必要だと思う。

ウイルスが初めて日本で確認されてから、約三年。私たちは今も目に見えないコロナと戦っている。いつになったら終息するかわからないという、先の見通しが立たない不安や恐怖と戦っている。今このような困難な状況だからこそ、私は手と手をとって合ってお互いに助け合っていくべきだと思う。私たちが戦う相手はコロナという“ウイルス”であり、“人間”ではない。ただ私はコロナを通じて様々なことを経験し、考え、大切なことに気づかされた。あたり前の幸せを取り戻すために、困難な状況の中でも互いに思いやりの心を持っていきたい。

【選評】

審査員長 山田小学校教諭 石井 佑奈

「川越市少年の主張作文」は、川越市青少年を育てる市民会議・川越市・川越市教育委員会が主催する作文コンクールです。当コンクールは、青少年が日常生活の中で考えていること、感じていることを広く社会に訴えることにより、同世代の青少年の意識啓発と、青少年の健全育成に関する大人の理解・関心を高めることをねらいとして、昭和六十二年度から実施されています。

歴史ある当コンクールに、今年度は中学生の部に二百九十一編、そして、高校生及び一般の部から六編という多くの応募がありました。その中から、審査の結果、中学生の部から十三編、高校生及び一般の部から二編の合計十五編を選作品に決定いたしました。

応募作品のテーマには「SDGs」「LGBT」「戦争と平和」といった、まさしく現代社会における諸問題を青少年の真っ直ぐな心で切り取ったものや、「将来の夢」「いじめについて」「家族」等、身近な事柄から自分の意見をまとめたものが多く見られました。その中でも入選作品として選ばれた作品は、ただ単にインターネットで学んだ知識だけでなく、自分の身近な体験から何かを「主張」するものが多かったです。

入選作品のうち、上位四作品は次の通りです。

最優秀賞 村橋 奏来さん 「アサーティブを知って」

優秀賞 佐藤 唯花さん 「大切なものを守るために」

優秀賞 田中 柊さん 「僕の机はミニサイズ」

優秀賞 鈴木 芽依さん 「私が『生きる』ということ」

最優秀賞になった村橋奏来さんの「アサーティブを知って」は、友人関係をより良くするために実践した、アサーティブという手段の奥深さと大切さを記しています。自分の意思を伝えるのはとても勇気のいることで、自分の気持ちに蓋をする方がかえって簡単なことに思えます。しかし、自分の意思を大切にすることも、コミュニケーションをとるうえで大事なことだと訴えています。村橋さんの素直な言葉で書いた文章は、特に同年代の青少年の心

に響く作品になっています。

優秀賞になった佐藤唯花さんの「大切なものを守るために」は、大好きなネギトロが地球温暖化の影響を受けていることに着目し、今の地球の環境に警鐘を鳴らしました。テレビやインターネットでよく言われる地球温暖化対策が、これからの私たちの生活にどのように影響をしてくるのかを具体的にイメージをしました。世界に向けて主張を発信するだけでなく、私たちにも身近なところでまだできることがあると主張する姿に、信念の強さを感じました。

優秀賞になった田中柊さんの「僕の机はミニサイズ」は、一人一台のタブレット端末が配られたことにより変わった、学習環境の変化から、特に「机の大きさ」に目を向け、率直な意見と提案を提示するというものでした。現実への単なる批判で終わるのではなく、前向きに学習へ取り組みようとする気持ちの強さを感じます。

優秀賞になった鈴木芽依さんの「私が『生きる』ということ」は、身近な人の死や先人たちの言葉から、日常の大切さを再認識し、限られた時間の中でいかにして「生きていく」実感をもっていくか深く考え記しています。命を輝かせるためには、目標に向け努力をすること、自分らしく歩むことが大切という主張は、青少年らしく清々しく、また頼もしきを感じさせます。

他の入選作品も、青少年が社会を、そして自分自身をどのように捉え、どうしていきたいのか、力強い主張が見られるものが多くあります。青少年の皆さんはこの作文集を通して、同世代の青少年の主張に触れ、自らの考えを深化させていってほしいと思います。

新型コロナウイルス感染症による制限のある生活も今年で三年目となりました。青少年たちは日々さまざまなことを感じ、考え、前向きに未来を生きようとしています。彼らの心のうちにある確かな主張を真摯に受け止め、さらによりよい社会を築くために、皆様に一読いただければ幸いです。